自分ゴトとして平和を考える
―ウガンダ・チャングワリ難民居住区を事例として―

【実践者】

氏名	**木村昌司**	
学校名	**茗溪学園中学校高等学校**	
対象学年	**中学3年**	
担当教科等	**社会（地理）**	
実践年月日もしくは期間（時数）	2025 年 9 月 17 日（1時間）	

【実践概要】

1. 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

2. 単元名と単元目標

① 単元名
沖縄研修旅行を通した「平和」への探究

② 単元目標
本校の中学3年生は，「総合的な学習の時間」の中で，「平和」の多様な捉え方を理解し，一人一人が「平和」に関わる研究を進める。研究のために必要な方法や問いの立て方も学びながら，12 月に行う沖縄研修旅行とウガンダの事例を通し，中学 3 年生全員が論文を執筆することができる。

③ 関連する学習指導要領上の目標
探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。（中学校学習指導要領 総合的な学習の時間）

3. 単元の評価基準

① 知識及び技能
現地を訪れる前に，必要な論文や書籍を読み，インターネット等からも情報収集を行い，知識を身に付け，問題意識を持ったうえで，現地を訪問する。

② 思考力、判断力、表現力等
論文執筆のために，論文のストーリーを熟考する。現地でのフィールドワークを通し，生の資料を収集するなど，オリジナリティが求められるほか，データで他者に納得させる必要がある。論文を執筆する過程では，文章表現力が求められる。思考を巡らせ，論文にまとめることで，構成力を身に付け，表現し，他者に発信する。

③ 学びに向かう力、人間性等

現地では自らの研究テーマに合わせて班ごとに行動計画を立て，班別研修も行う。仲間と協力をしながら，班別研修の計画をたて，アポイントなどをとり，社会性も身に付ける。

4. 単元設定の理由・単元の意義

① 単元設定の理由

本校では高校2年次に個人課題研究を実施しており，中学3年次には研究の基礎的・基本的な能力を身に付けるための個人研究を行ったらどうかと着想を得て，本単元を設定した。

また，ウガンダでの事例を加えることで，広い視点で「平和」を捉えることに繋がるのではと考えた。「難民問題」「紛争」といったキーワードを耳にしたとき，どこか遠くの世界で起こっているものとして，中学生であっても，大人であっても，なかなか自分ゴトとして捉えることは難しい。また，ウガンダがアフリカ最大の難民受け入れ国であることは，あまり知られていない。なぜ難民が発生しているのだろうか。また，なぜウガンダは難民を受け入れる寛容さがあるのだろうか。チャングワリ難民居住区で暮らす人々に寄り添いながら，日本に住む私たちに何ができるのか，生徒とともに考えたい。授業を通して、小さな行動を起こし、変化を生み出すきっかけづくりを与えたい。

② 単元の意義

「平和」には様々な解釈がある。平和学の第一人者であるヨハン・ガルトゥングは「戦争がない状況は消極的平和に過ぎず，貧困や差別など構造的な暴力のない積極的平和を目指すべきだ」と提唱している。ガルトゥングの積極的平和を実現するためには，どのような取り組みが私たちに必要なのか今一度，考えるべき点である。沖縄やウガンダの豊かな自然や文化，歴史などから，生徒には「平和とは何か」を考え，悩み，向き合ってもらいたい。

③ 児童/生徒観

中学3年生（MG クラス，4クラス 161 名）は，前向きで明るい生徒も多い。本校は中高一貫の学校であり，全校の 20%ほどが世界 40 か国からの帰国生で占めている。また近年では留学生も多く在籍しており，このような環境に身をおいていることから，国際感覚に長けている生徒も多い。

④ 指導観

本校では，国際理解教育に重きをおき，国境，言語，価値観を超えて未知なる課題に果敢に挑戦できるような人材を育てている。高校部からは国際バカアロレア（IB）コースが設置されており，国内大学のみならず海外大学への進学者も多いのが特徴である。

「世界」は身近な本校であるものの，「平和」「戦争」「難民」といった諸課題に対しては，自分事として捉えることは難しい状況にある。断片的な知識から，誤解や偏見，イメージで物事を考えることも多々ある状況である。多面的な見方や考え方を生徒に伝え，生徒とともに「平和」について考えたい。

5. プログラム計画

回	テーマ ねらい	方法・内容	使用教材等
1	研修旅行ガイダンス（日程説明） ねらい：日程を理解する。	研修旅行全体の行程・プログラム，ねらいなどについて説明する。	パワーポイント
2・3	沖縄の「地理」「自然」 ねらい：沖縄の地域特性を理解する。	・地理教員（木村）は「沖縄の自然や文化」について，地学教員は「沖縄の地質，生物相」についてそれぞれ講義を行う。	パワーポイント
4	朝日新聞「知る沖縄戦」 ねらい：沖縄戦について理解を深める。	・新聞記事を基に，様々な視点で「沖縄戦」を紐解く。	朝日新聞教育特集「知る沖縄戦」
5	普天間基地 ねらい：普天間基地をめぐる問題	・普天間基地移設問題について，新聞記事を用いて，どのような考え方・立場	パワーポイント

	を理解する。	があるのかを考える。	
6・7	平和の定義とテーマ第一案の執筆・相互添削，第二案の執筆 ねらい：自身の関心のあるテーマと向き合い，表現する。	・自身の考える平和を定義し，論文の執筆を開始する。また相互添削により，より良い論文へと仕上げる。	パワーポイント
8	資料探索の方法を探る ねらい：テーマ探索から論文執筆のきっかけを探す。	・司書教諭から，「新聞記事データベースを用いて，問いのタネを見つける」というテーマで講義を行う。	パワーポイント
9 （本時）	自分ゴトとして平和を考える ねらい：ウガンダでの「平和」のあり方を考える。	・ウガンダ・チャングワリ難民居住区の事例から「平和」のあり方を考える。	パワーポイント ワークシート
10～ 13	班別研修先の探索 ねらい：アポイントをとることを通し，社会性も身に付ける。	・自身が解き明かしたいテーマに対して，適切な聞き取り調査先を見つけ，仲間とともにアポイントをとる。	パワーポイント
14～ 18	論文の執筆 ねらい：現地で収集したオリジナルのデータを基に，全体の構成を考え，説得力のある論文に仕上げる。	・沖縄研修旅行後，論文執筆を行う。	パワーポイント

6．本時の展開

時間	1時間
本時のねらい	生徒一人一人がウガンダの難民問題について，チャングワリ難民居住区で暮らす人々に寄り添いながら，自分ゴトとして捉え，何ができるか考えることができる。

過程 （時間）	**教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態**	**指導上の留意点（支援）**	**資料 （教材）**
導入 （2分）	・これまで取り組んできた沖縄研修旅行に向けての「平和」学習との繋がりについて説明する。		
展開 （40分）	1　ウガンダを〈知る〉 ・ウガンダの地域的な特徴を、自然環境・農業・政治などの面から把握する。 ・Google earth の航空写真をみせる。 Q ウガンダの人々はどのような食生活を送っているのだろうか。 ・「マトケ」（調理用バナナを蒸かして潰したもの） ・「ポショ」（キャッサバやトウモロコシなどの粉を入れて練ったもの） ・「サツマイモ」など多くから選ぶことができる。 2　難民問題を〈知る〉 Q 世界にはどれだけの難民・避難民がいるのだろうか。 ・日本の人口と同程度の1.23億人であることに気づく。 Q 難民送出国・受入国の世界地図をみて気がつくことはないだろうか。	・興味をもってもらうためにクイズを行う。 ・ウガンダは，東アフリカの内陸国に位置し，南スーダン，コンゴ民主共和国，ルワンダ，タンザニア，ケニアに囲まれ，周辺国と友好的な外交政策を展開している。かつては暴君アミン大統領（1971-1979）の弾圧により，殺戮されたウガンダ人は 30 万人以上とされるが，その後のムセベニ大統領（1986-現在）政権下では安定的な政治を実現していることを 2025 年の選挙の様子と合わせながら紹介する。 ・UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）のグローバルトレンドを提示する	・指導者作成のスライド ・バナナ収穫の様子について，動画 ・映画「ラスト・キング・オブ・スコットランド」の一場面（アミン統治下の様子）

	・ウガンダはアフリカ最大の難民受け入れ国である。 ・世界第 5 位の受け入れ国である。 3　自分ゴトとして〈考える〉 ・「いのちの持ち物検査」を行う。 ・「お金で買えないもの／自分を構成するもの／お金で買えるもの」の3つの視点で自分が大切にしていることを書きだす。 ・上記3つを順番に喪失する疑似体験を通して、どう感じるか想像を巡らせる。 4　ウガンダにおける難民受け入れの事例を通して〈考える〉 ・ウガンダはこれまで 190 万人以上の難民を受け入れ，現在も月に 1 万人以上の難民を受け入れている。 Q　なぜウガンダでは多くの難民を受け入れているのだろうか ・次に，「チャングワリ難民居住区」の事例から考える。 Q　なぜコンゴ民主共和国から難民が押し寄せてきているのだろうか ・難民居住区の家族へのインタビューから考える。 エティエーンさん（86 歳）・エンジェルさん（11 歳） エンジェルさんの父母は，マラリア・栄養失調で病死。盲目の祖父と一緒に暮らし，生活は困窮。 レアさん（16 歳）・モシメさん（15 歳） 父はコンゴ民主の戦闘で亡くなり，母は現在別に暮らし，6人兄妹で生計を立てており，生活は困窮。 ・ワークシートに自分の考えを記入し，仲間と意見交換をする。 「難民のために今の自分には何ができるのだろう？」 「難民のために将来の自分には何ができるのだろう？」 「難民のために、皆で力を合わせてできることは何があるだろう？」	・ワークシートを配布し，具体的に書きだすように指示する。 ・最後に，「自分の命以外を失ったら？」と問いかけ，皆で1分間目を瞑り，難民の人々の心の痛みを感じてもらう。 ・自分が幸いにも持っているもの，支えられているものを実感し，それをどのように社会や世界の人々に役立ててもらえるか，具体的に考えてもらう。	・ワークシート ・ワークシート
まとめ （3 分）	『難民問題を「自分事」として捉え，一人一人が関心を持ち，理解を深め，小さな行動を起こすことで，変化を生み出すことができるのではないか？』と結びの言葉とする。		

7. 評価規準に基づく本時の評価方法

ワークシートへの取り組み，提出をもって評価を行った。

8. 学校外との連携

なし

9. 生徒の学びの軌跡

【生徒の授業を受けての感想（一部抜粋）】
・ウガンダの現状を知り，自分が恵まれていることを再認識した。
・自分たちは勉強が嫌だと言えるくらい当たり前に教育を受け，当たり前に3食を食べ，当たり前に暖かい家で寝ているのに，難民の人たちはそれが当たり前でないことを知り，住んでいる世界が全然違うなと思った。
・今まで難民について考えたことがなかったので，考えるきっかけになった。自分で調べ，何ができるか考えてみたいと思った。
・実際に難民として暮らしている人の話を聞き，ネットなどで情報をみるより実感があった。
・実際に困っている人たちがたくさんいるのに，全員を救えない状況に，自分は何ができるか調べていきたい。
・将来が見通せないような人がいることに驚いた。自分に何ができるかを考えるのは難しい。
・「自分が今あるものがなくなったら…」と考えて，難民生活について考えが近づけられたと思う。
・他人事を自分事のように考えることが大切だと思った。
・初めて難民の気持ちを考えることができた。日本は難民の受け入れをもっとするべきだと思った。
・難民が一人もいない社会の実現には長い年月がかかるだろうし，不可能に近いと思う。でも一人でも少なくするために自分が何をすべきか見直そうと思った。
・難民のために自分たちができることは意外とたくさんあったので，できることから行動に移してみたい。
・シリアの話はニュースでよくみていたが，ウガンダの話はなかなかみないので，知れて良かった。
・難民の事はあまり自分に関係ないと思っていたが，スマホの原料問題など，意外と関係していた。
・世界の難民の数は日本の人口数と同じで驚いた。将来何かできることがあったら，積極的に行いたい。
・沖縄とウガンダではあまり接点がみえなかったけど，「平和」という意味では関係していて，世界の平和にも目を向けて沖縄に行きたい。
・写真があって，今もこういう生活の人がいると実感することができた。難民問題は世界が抱える課題だと思うけど，日本もなかなか難民受け入れが厳しいし，解決するのは難しいと思った。自分が出来ることを考えた時に，あまり思いつかなかったので，調べてみようと思う良い機会だった。
・ウガンダはたくさんの難民を受け入れていたり，農業が発達しているので，良い国だなと思いました。

10. 自己評価

① 成果が出た点

授業実践時の生徒の感想を読む限り，意図した狙いは概ね達成できたと考えられる。積極的に仲間と意見交換をする姿もみられ，生徒自身も自分ゴトとして，「平和」と向き合い，考えることができたのではないかと考えている。

② 苦労した点

生徒たちに，いかに自分ゴトとして難民問題を捉えてもらうか，悩んだ。「いのちの持ち物検査」ワークシートを授業の中盤に用いることで，一方的な講義形式とならず，生徒自身が喪失の疑似体験を通して，日ごろの自分自身の生活について見つめ直す授業へとなったと考えている。

③ 改善点

今回の授業実践は，高校の「地理総合」「地理探究」の授業ではなく，中学の「総合的な学習の時間」

で実施を行った。授業時数の確保が難しく，本来は数時間をかけて丁寧に扱うべき内容を盛り込み，1時間での実践となった。関心をもっていた生徒からは「もっと授業を受けたかった」との声も聞かれた。授業の最後に，「いかに行動するか」を考えてもらったが，授業時間内では深く掘り下げて考察することは難しかった。

もし授業時数が確保できたのであれば，「難民になるストーリーを想像するワークの実践」・「ウガンダでの事例を踏まえて，実際に自分たちで具体的に行動を起こしてみよう」という形での実践を行いたい。つくばから世界へと羽ばたき，日々の暮らしの中で困難に直面する人びとに寄り添い，その声にじっと耳を傾けるところから問題解決への知をはぐくむ実践的な教育の実現を目指していきたい。

④ 自由記述

本実践は，チャングワリ難民居住区で私が実際に見聞きをしたことで，実現することができたものである。授業者が経験したうえでの実践は，説得力が大きかったものと思われる。ウガンダ以外のウクライナ，シリアなどでの事例を扱う際，どのように授業を組み立てるかは，課題である。

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

「令和7年度茨城県高等学校教育研究会地理部研究発表会」（令和 7 年 11 月 20 日，会場：JICA 筑波）にて，廣瀬愛先生（茨城県立日立北高等学校）とともに，茨城県内の地理の先生方に向け，授業実践発表を行った。また，機関紙「茨城の地理」（第 63 号）にも授業実践内容が掲載される予定である。

写真：高教研地理部会での発表の様子

12. 自由記述

聞き取り調査にご協力いただいたチャングワリ難民居住区の皆様，また訪問の便宜を図ってくださった AAR JAPAN（難民を助ける会）ウガンダ事務所の秋山広輔様をはじめとするスタッフの皆様に御礼申し上げます。

また，充実した教師海外研修のプログラムを提供してくださった JICA 筑波の皆様に御礼申し上げます。

13. 参考資料

資料名	著者名等	出版元、URL 等
「ウガンダを知るための 62 章」【第 2 版】	吉田昌夫・白石壮一郎	明石書店
自分ゴトとして考える難民問題	日下部尚徳	岩波ジュニア新書
世界の難民をたすける 30 の方法	滝澤三郎・編	合同出版
開発教育基本アクティビティ集 2 難民	岩岡由季子、八木亜紀子	開発教育協会（DEAR）
難民についての授業の広場	国連 UNHCR 協会	https://www.japanforunhcr.org/news/2017/forteachers

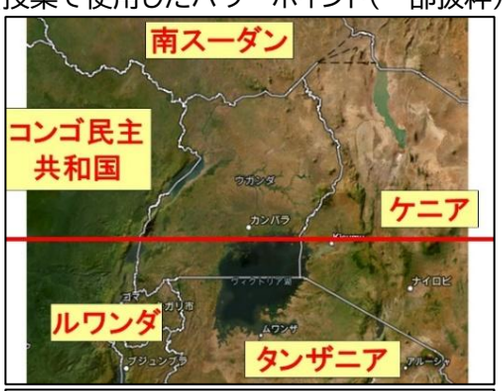
14. 本時で使用した資料

【授業で使用したワークシート】

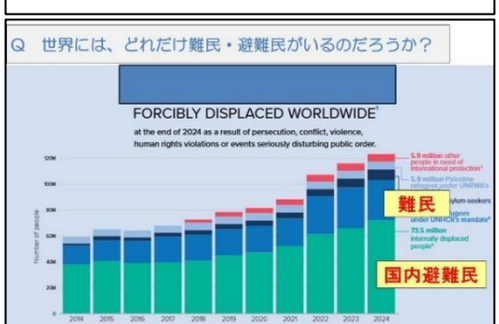
『いのちの持ち物けんさ』

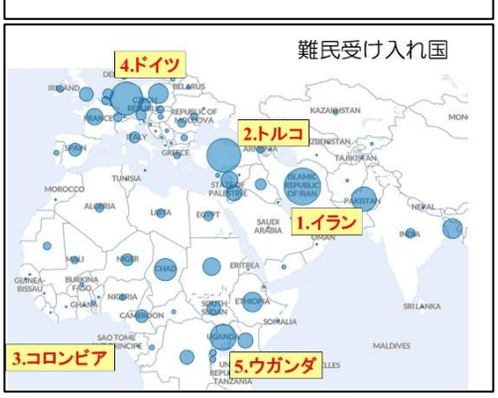
お金で買えないもの	自分を構成するもの	お金で買えるもの
いのち		

【授業で使用したパワーポイント（一部抜粋）】



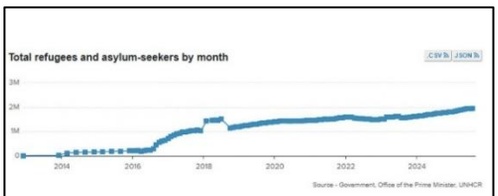
ムセベニ大統領（1986～現在まで政権を握る）





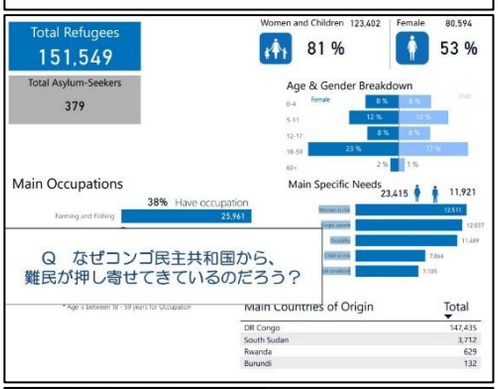
「いのちの持ち物けんさ」

- 今の自分のアイデンティティを構成するもの、支えているものを書きだし、「自分」とは誰なのかを見える化する



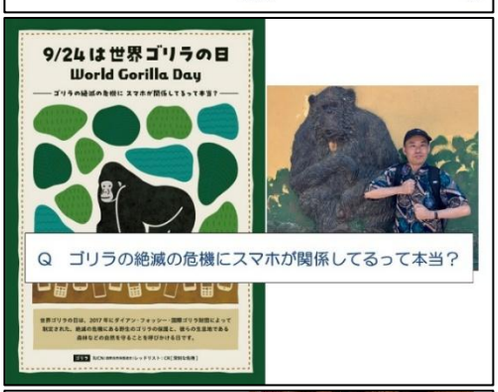
・ウガンダは190万人を超える難民を受け入れ
・帰還せず、月１万人以上を超えるペースで流入中

Q　なぜウガンダでは、多くの難民を受け入れられるのだろうか。



Q　なぜコンゴ民主共和国から、
難民が押し寄せてきているのだろう？

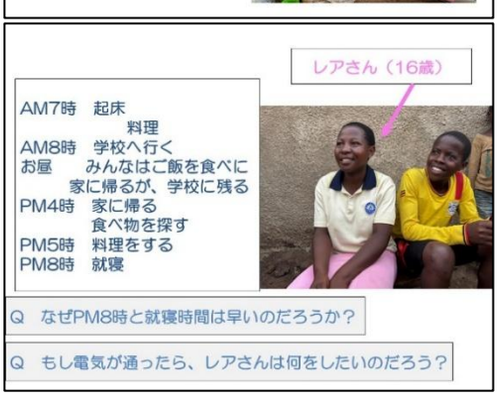
毎日新聞2025.3.22



Q　ゴリラの絶滅の危機にスマホが関係してるって本当？

・父・母は，コンゴ民主共和国から逃れるも，マラリアで病死
・盲目の祖父と2人で暮らしており，生活は困窮

・父は，コンゴ民主共和国で亡くなった
・母は，一緒に逃げてきたが，別に住んでいる
・６人兄妹で一緒に暮らし，生計を立てている



AM7時　起床
　　料理
AM8時　学校へ行く
お昼　　みんなはご飯を食べに
　　家に帰るが、学校に残る
PM4時　家に帰る
　　食べ物を探す
PM5時　料理をする
PM8時　就寝

Q　なぜPM8時と就寝時間は早いのだろうか？

Q　もし電気が通ったら、レアさんは何をしたいのだろう？

朝日新聞2025.5.16